

## 5. 平安時代

桓武天皇は、延暦 13 (794) 年、平安京（今の京都）という新しい都に朝廷を移しました。

この後、源 頼朝が鎌倉に幕府を開くまで、国政の中心が平安京にあった時代の約400年間に平安時代といえます。



### ○ 空海と満隆寺



門司区の靈峰・戸ノ上山の麓に、戸ノ上神社があり、その一角に満隆寺があります。

この満隆寺の開祖が、死後に「弘法大師」と呼ばれた空海と伝えられています。

延暦 23 (804) 年 6 月、空海は橘逸勢や最澄とともに、遣唐使船に乗って唐に渡り、その地で、真言宗の修行を積みました。

2 年後の大同元 (806) 年 10 月、空海は筑前国博多（福岡市）に帰国し、そこからまた船に乗って、京都への帰路につきました。

その船が関門海峡の西の入り口となっている大瀬戸に乗り入れた時に、

空海と門司の縁が生じました。

戸ノ上山麓の浜から、戸ノ上山を見た空海の目に、雲が山頂をたなびいているのが映りました。靈感を得た空海は、柳ヶ浦の浜辺の一角（今の門司区大里本町あたり）に船をとめてもらって上陸し、山麓に草堂（そまつなお堂）を結びました。そして、その草堂の中に仏像を安置し、唐で修めた宗教に基づいた仏事を、十七日と十七夜、行いました。その草堂が後に満隆寺となったのです。



満隆寺（門司区の戸ノ上神社内）

空海は、博多に上陸すると、その地でも真言宗の仏事をしました。これが、わが国最初の真言宗の布教となりました。ですから、戸ノ上山麓でのことは、豊前国で初、九州では2番めとなるわけです。

十七日と十七夜の仏事を終えた空海は、京都へと去りました。

そして、弘仁2<817>年に空海は、紀伊の国（和歌山県）の高野山を霊場として、金剛峯寺を開き、真言宗の開祖となりました。空海が門司の地に伝えた真言宗の寺

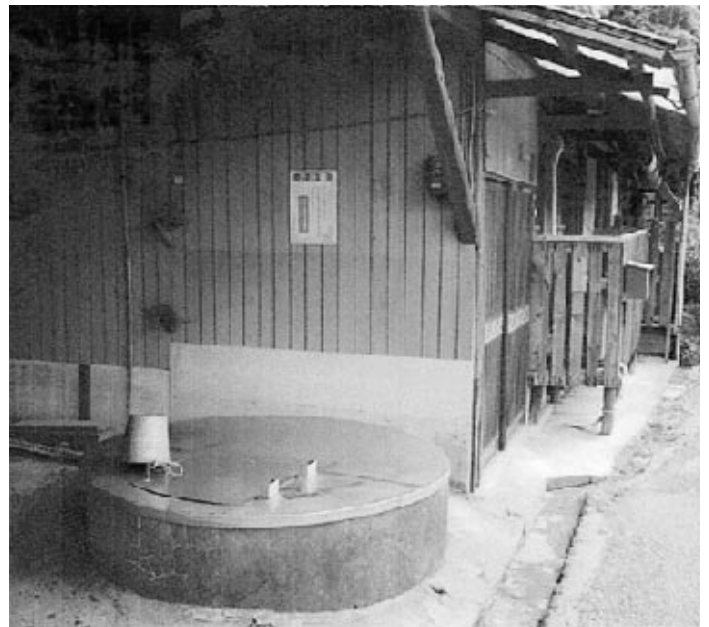
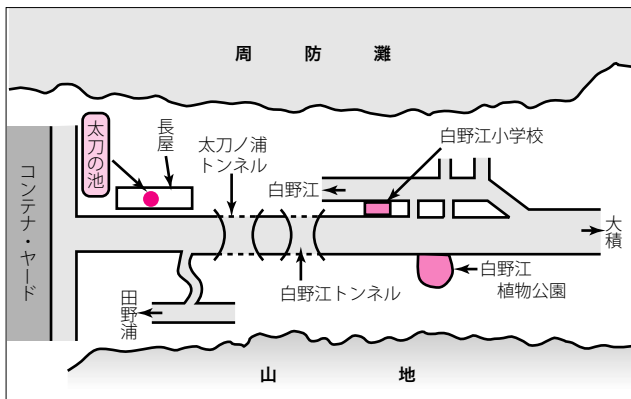
「満隆寺」には、今もお参りにくる善男善女の姿が絶えません。

○ 田野浦・和布刈沖での源平合戦にまつわる伝説

● 太刀の池、（太刀の井戸）

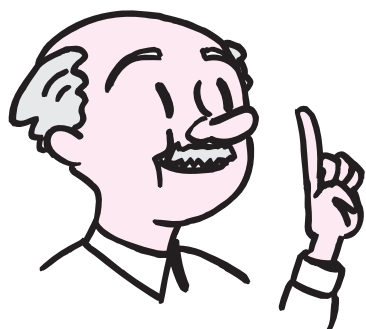
門司区田野浦の東の端の地は、北九州市の町名改正で大字田野浦となっていますが、伝説に由来した町名「太刀浦」が昔からの地名でした。その地名は現在、海面の埋め立てによって広大なコンテナ置き場の住所名として引き継がれています。

白野江小学校から田野浦に向かって、白野江と太刀ノ浦のトンネルを抜けて行くと、長屋風の住宅があります。



太刀の池（太刀の井戸）

この長屋風の住宅の中ほどに澄んだ水をたたえた井戸があります。太刀の池（太刀の井戸）がこれです。



地元の古老の話

この池は、どんなに日照りが続いても、決して水枯れも水位の低下も起きないという不思議な池なんじゃ。

この池の名の由来となった伝説は、2つあってな。

1つは源平海上決戦を前にして、平氏の身分の高い武将が平氏の戦勝を祈願して、安徳天皇の御太刀ひと振りをおもをこの池に沈めた、というもの。

もう1つは、戦いの後に、平氏の武将が、刀についた血を池で洗ったというものなんじゃ。

この池の水は昔から使われていて、水道のある今でも、生活用水として使っているんじゃよ。

### ● 平家一杯の水

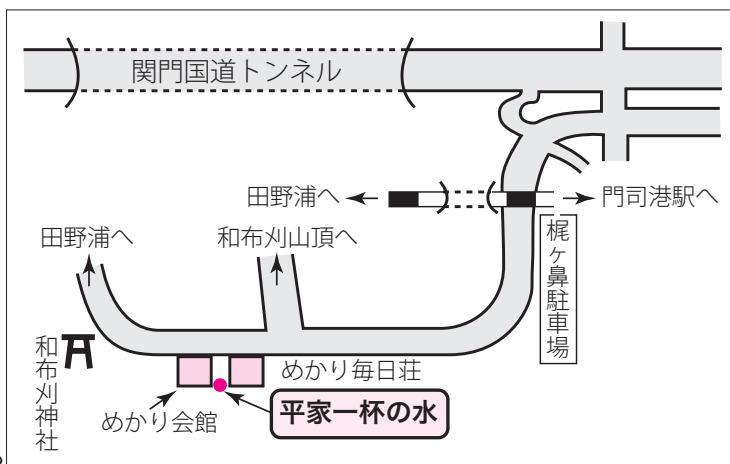
瀬戸内海国立公園の一角が和布刈公園となっている古城山です。その山頂には「門司城跡」の石碑が建っています。

そこは、平安末期の源平の田野浦・和布刈沖海戦を前にして、平知盛が柵（見張り櫓か？）を築かせた所です。その山頂への登り坂と和布刈神社方面に延びる道路が接する所近くにめかり会館とめかり毎日荘があります。

この2つの建物の間の裏側に、清水が湧き出て流れる所がありました。この湧き水が「平家一杯の水」で、次のような話が残っています。

海戦で深手を負った平氏の武将が死力を尽くしてこの浜に泳ぎ着き、意識をもうろうとさせていました。

ヒリヒリと痛むほどにのどがかわいていたその武将の耳に、真水が流れる



右はめかり毎日荘、左はめかり会館

かすかな水音が聴こえてきました。その武将は残されていた最後の力を振りしぼって、清水が湧き出ている崖に近づいて行き、両手にその水を受けて飲みほしました。

2杯めを両手に受けて、その武将は口に含みました。ところが、先ほどの清水は、なんと海水のように塩からい水に変わっていたのです。

この話は、この武将が一杯めを飲んだ直後にこと切れ、2杯めを両手に受けながら死んでいったということでしょう。

### ● 平家蟹と真鯛

寿永4（1185）年壇ノ浦の御裳裾川の河口近くに追い詰められた平軍の武将や一族の者たちは、「生きて源氏に捕われし者にならじ」と、敗戦の無念さを怒りの形相にあらわして、身を投じました。

女房や女官たちは赤色のあでやかな着物・袴姿で、先に入水して海底深く姿を隠した安徳天皇と二位ノ尼のあとを追いました。

後に、入水自殺した平軍の武将や一族の兵たちは、入水時の怒りの形相を甲羅に刻んだ平家蟹となり、女房や女官たちは真鯛に生まれ変わりました。そして、関門の海底深くにある都に住んで、生命を永らえるようになりました。

真鯛に生まれ変わった女房や女官たちは、あでやかな真紅の舞姿と泳ぎで安徳幼帝をなぐさめました。また平家蟹となった武将や兵たちは、怒りの形相をした甲羅を、海底まで攻めてくるかも知れない海上の源軍に向けたまま、警護に努めました。

北九州市の対岸・下関の古老たちは、関門の真鯛で、体調が10センチ以下のものを「小鯛」といわずに「小平家」と称しています。



平家ガニ



● 義経の八艘跳び

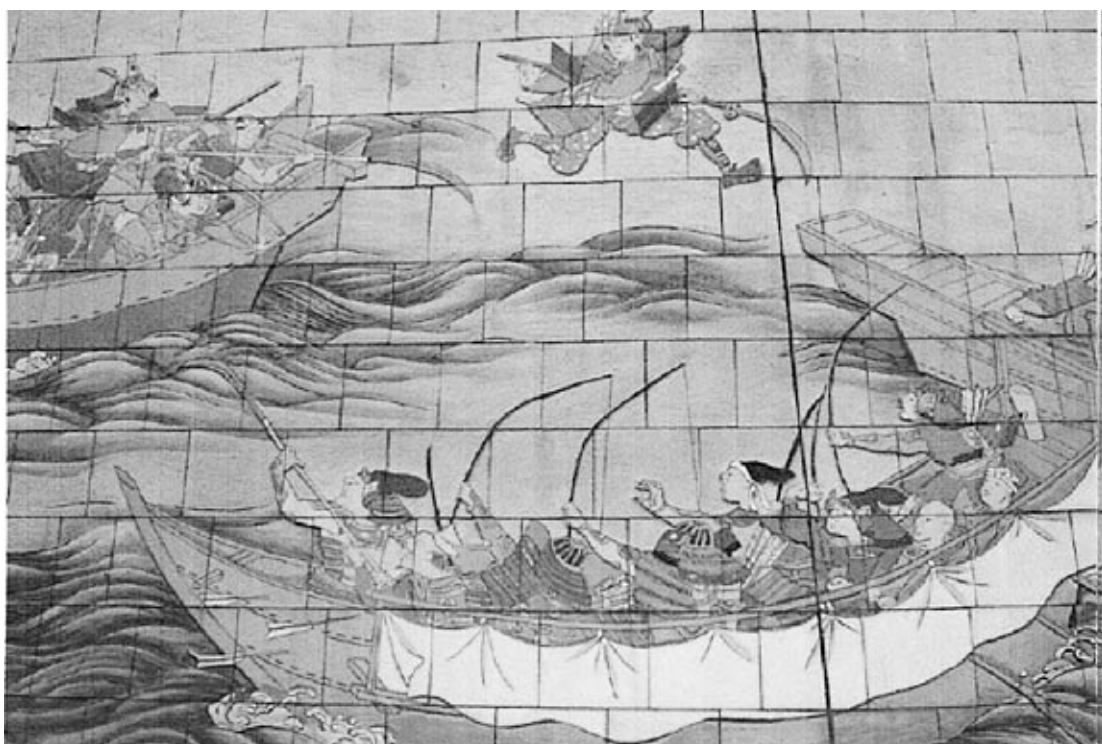
源 義経の身の軽さと動作の素早いことは、幼名を牛若丸と名乗っていたころ、五条大橋で弁慶との立ち回った話で有名です。

牛若丸を改め、元服して源九郎義経と名乗った以後も、その身の軽さと動作の素早いことは、「義経の八艘跳び」という話に作られています。

これは、室町時代の初期にできた「御伽草子」の中に出てきますが、話の出どころは、寿永4(1185)年3月の源平最後の海上決戦の田野浦・和布刈沖の海上で、平軍の猛将・平教経に追われた義経が、味方の小舟をピョン、ピョン、ピョン・・・と、次から次へと跳び移って、八艘めの舟に難をさけた、という話です。

この話の原型は「平家物語」の中の「能登殿最期」の記述です。その部分を分かりやすく書いてみましょう。

能登守教経は義経を見知らなかったのに、軍装が目立つ武将が義経と信じて、平軍の舟に飛び込んできた。偶然にもその武将が義経であった。義経もまた、教経を見知ってなかったのだが、かなわぬと思って、薙刀を弓手の脇にはさみかかえて、二丈（約6m）ほど先にいた味方の舟に飛び移って、難をのがれた。



門司区の和布刈公園にある「義経八艘跳び」のタイル壁画面